

『先輩、5分遅刻ですよ』

『あの、遅れるなら遅れるつて連絡入れてくださいね?』

『もしかしたら事故にあつたんじゃないって、すご心配したんですから』

「それ」

そ、そんな息切らしながら謝らないでください
次から気をつけてくれればそれでいいですか』

「でも珍しいですね？」

『私はいや、彼女とのデートが楽しみすぎて夜更かしして寝坊したとか』

『あはははつ、先輩つ！

「笛へた」(笑いながら)』

『ごめんなさい、先輩があまりにもわかりやすいのでつい』

『でもそういうことなら今日の遅刻は許してあげます』

『それじゃ行きますよ先輩！』

{ } { } { } { } { }

一着きました

卷之三

「何か不満でも…」

『なんで前來た時より挙動不審なんですか』

『これから何度も来ることになるんですから、もう一つ！』

『さ、入りますよ

今日は私が先輩を服を選んであげる予定でしょ？』

『そんなんじゃ彼氏として恥ずかしいですよ』（耳元で）

『ふふつ、単純でよろしい…

あっ、これとかどうですかね

先輩に似合うと思うんですよ私』

『先輩って普段は本読んでて地味に見えますけど』

『身長は高いし、細身でスタイルいいんですから』

『こう、やつて

顔を見せるように髪を上げて

こういうジーンズ穿いて、ジャケット羽織ると…』

『うん、さつすが私
センスがいい』

『さつ先輩、鏡見てきてください

きっと今の自分悪くないって思いますよ？』

『ほーら、ここ立つてください』

『ね？

悪くないでしょ？』

『先輩性格は…うん、まあ人それぞれなのでいいとして
外見はそこそこいいんですから、もつと自信持つてください』

『少なくとも私は

先輩の中身も好きです、よ?

えへへつ

・・・・・』

『なつ、

なにか言つてくださいよお…』

『それに、いつもなら先輩が照れて私が茶化すところじゃないすか』

『別に、

いつも通りからかっただけですって、ほんとです』

『調子狂いますねえ…

なんか今日の先輩ずるいー!』

『だから、そんなマジな顔しないでください』

『遊びじゃ、すみませんよ』

(声は震えてる)

『は？ちょっと！

仕返しにしてはやりすぎですよ!?』

『もうっ！

反省してるならこの後のご飯は奢つてください』

『それで許してあげます

これでも破格の条件なんですかね?』

『もおー！なんでそこで笑うんですか』

『はい！もうおしまい！

この話はここでおしまいです』

『お昼行きますよー!』